



社 志 散 步
函 館 史 館
田 中 良 一

この欄は毎号執筆者を変え、先ず北の端から始めるが必ずしも地理的順序によらない。

(編者)

去る八月三日三十八年ぶりに札幌の土を踏み、帰途八月八日、函館市立図書館へ立寄り、貴重文献の撮影を許され新島先生の遺蹟を踏査した。結果は意外の収穫となったのみならず、三十八年前私が描いた啄木の旧墓の

荒れた姿の見取図と記録とが証拠になり啄木に關する同地のある論争が解決するという後日物語りさえ生じた。

記念碑緣起

函館市仲浜町六番地相馬倉庫裏の船着場に新島先生脱出の場所を示す記念碑が在ることは、市の観光地図にも示され、タクシーの運転手も知っているが、これは昭和二十九年同市の港祭りに際して同市が建て、同志社も資金を寄せ、その上大塚総長の筆蹟を刻った大理石製タブレットをも送って協力した。

ところがこれよりずっと以前から、同所倉庫の壁に新島先生脱出の所を示す掲示をしては、との同地有志と校友らの勧めがあり、同志社本部庶務課のレイアウトによる明朝活字体の銘、ビニール張り木製タブレットを作り、昭和二十七年七月二日、始めて上記煉瓦造倉庫の壁に掲げ新聞もこれを報道した。(写真)森中章光氏編「新島先生詳年譜」(昭和三五年刊)余録、昭和二十七年の条は、おしいことに僅かに十年前のこの件を誤記している。歴史というものはこんな風にして事実から遠ざかって行くものであろうか。

箱楯紀行

新島先生は「箱楯紀行」という自筆の記録を残された様子で森中章光氏によって「新島先生書簡集続篇」(昭和三五年刊)中に活字に移植されている。活字本は読みのくだらぬ箇所があるが、幸い挿入の原本第一頁写真により活字本八行までを校正して読み下した。八行のうち四カ所の誤写があつた。例えば原本には「近日」とあるが活字本には「を」とある。

然しこの紀行は誤写の有無にかかわらず一統を乞いたい。新島先生の心境、教養の高さと広さ、そこから生ずる達識、当時の東北地方の人文等を知り得る興味深い文献である。

居留地

「紀行」によれば乗船快風丸は三月十一日品川沖を発し、四月二十一日函館に入港している。その日の記録に、

夕晚五時に箱楯港へ到着す……築島近傍……の讃岐屋英三郎の家を宿と……(活字本による)

とある。私も朝五時頃函館港に着いたが、早朝の港へ函館山の雄姿は夢のように美しい。私の踏査の中心はこの築島の趾である。築島とは埋めたての人造島であるが、函館図書館所蔵、万延元(一八六〇)年刊行「官許箱楯

全図」及び「函館沿革地図」中の元治元（一八六四）年の部分は築島を「外人居留地と表示し、その位置も明らかで、街からは橋で連絡され、橋を落すと外人は孤立する。実測の結果この築島が現在の相馬倉庫敷地であることは明らかで、その大きさは同図書館所蔵「函館税関沿革史」により凡そ奥行（南北）四十間、幅（東西）五十間ほどの長方形であることがわかる。また同書中の文久元（一八六一）年の函館奉行（村垣淡路守）文書によると、ここに英米露の商館十軒と「連上所附改所」すなわち税関があり、これらの商館は五軒ずつ左右に向いあつてならば中央に通りがあつた。通りの一方は街へ連絡の橋につづき、一方は沖の本船と連絡する伝馬舟を着ける場所になつてゐる。先生を導いた富士守吉氏の勤めたポーター商会もこの築島にあり、右の奉行文書によると橋を渡つた左側かかの一廓がそれであつた。

脱出のところ

先生の英文回顧録によると、六月十四日夜半、かねてのしめしあわせにより、函館山の麓の神明社祠堂沢辺方を出て途中犬の遠吠えを聞き下駄をぬぎ捨て、はだしでポーター商

会の富士氏を訪ねた。富士氏は遺留品から足がつく恐れがあるとして、ぬぎ捨てた下駄を拾いに行き、さらに商会の裏口から舟着場へ先生を導いたことになつてゐる。その道筋も裏口もすべてその位置を推測することができ、小舟に乗りこむところを警吏が誰何し、豪胆の富士氏がうまくその場をつくろつてゐるが、その場所から十間右手の岸壁に税関の分室があつたのだから警吏の目につかぬ方が不思議といえる場所である。

さてこの築島の街に面した一面は明治十年の地図では既に埋め立てられて現状のように陸続きになつてゐる。その三方の岸壁も改造が推測されるが、今も伝馬舟を着ける場所だけは改造のあとが認められず、ペリーの日本遠征記中の挿画に見えるのと同じゆるやかな傾斜の幅二間半ほどの石だたみが海水につづく。（カット参照）くり返していうが、この石



だたみに富士氏が小舟を着けた。先生自筆のこのときの姿絵によると、先生は姉さん冠りに手拭を冠り、回顧録によると、警吏誰何のときは小舟中からだを伏せられた様子である

この一歩

私がここを訪れたときは夕方でもなく、港内のあるかないかのうねりが間遠に寄せては引き引いては寄せていた。この波打際を二十一歳の先生が一步またがれることの成功が、そして富士氏の豪胆により幕府の警吏が撒かれた瞬間が、日本の宗教史、教育史、思想史に、さらに個人の人生観に重大な意義を付け加えることになつたのだと思うと、旅愁も手伝つたのか、年甲斐もなく、押え難い感傷に流され、石だたみに腰をおろしたまま長くたち去ることができなかつた。

月明るしこの百年を寄する波

（監理部長）